

# S. I. Hayakawa と *Chicago Defender*

## ——第二次大戦下の異人種間共闘の行方——

村山瑞穂

### はじめに

言語学者として活躍し、日系アメリカ人初のアメリカ上院議員ともなった日系アメリカ人二世、Samuel Ichie Hayakawa (1906–92) は、アメリカ内外に名を馳せた有名人である。しかし、アジア系アメリカ研究においては、研究の基盤を築いたリベラルな学生運動に敵対した人物として等閑視され続けてきた。1960年代、サンフランシスコ州立大学では、アジア系アメリカ研究を含む Ethnic Studies をカリキュラムに含めることを求めて立ち上がった人種的マイノリティの学生を中心とするストライキが続いたが、ハヤカワはこうした学生運動を懸念する教授陣の先頭に立ち、これを阻止しようとしたことで知られている。1968年には学長となり、学生たちに強硬姿勢で対峙したのである<sup>1)</sup>。

また、この時の対応が保守派の共感をよび、1976年には民主党から共和党に鞍替えし、上院議員選挙に出馬、当選し、アメリカ本土初の日系アメリカ人上院議員となった。1980年代に展開された日系アメリカ人強制収容に対する謝罪と補償を求める運動を批判し、イランアメリカ大使館人質事件に際しては、アメリカ国内のイラン人を強制収容することを主張したことで知られており (*Encyclopedia of Japanese American History*, 189)、保守の権化とみなされている。

しかし、ハヤカワがかつては非常にリベラルな側面を持ち、第二次世界大戦中、アフリカ系アメリカ新聞、*Chicago Defender* のコラムニストであったことは、あまり知られていない。本論は、ハヤカワが担当した『シカゴ・ディフェンダー』のコラムを読み解き、アジア系アメリカ研究の問題系に照らしつつ、

アフリカ系アメリカ新聞の日系人コラムニストとして彼の果たした役割、意義、問題点を考察するものである。

## ヒサエ・ヤマモト

### ——もう一人のアフリカ系アメリカ新聞の日系人コラムニスト

アジア系アメリカ研究において、アフリカ系アメリカ新聞の日系二世コラムニストとして取り上げられてきたのは、S. I. ハヤカワではなく、Hisaye Yamamoto (1921–2011) である。ヤマモトは短篇のみを残した寡作な作家ながら、珠玉の短篇群はアジア系アメリカ文学の古典としての地位を占めている。主に、ジェンダーとエスニシティが交錯するテキストとして、“Seventeen Syllables”や“Yoneko’s Earthquake”がよく論じられてきたが、1992年のロサンゼルス暴動以降、ヤマモトの異人種間関係のテーマを扱う短篇についても議論されてきた。

ロサンゼルス暴動は、従来の白人対黒人という二項対立的な構造では捉えきれないアメリカの複雑な人種関係を象徴する事件であり、ことにアフリカ系アメリカ人とアジア系（とくにコリア系）アメリカ人の対立がクローズアップされ、兩人種間関係の再検証が求められることとなった。ヤマモトの短篇にみる異人種間関係のテーマについて考えるとき、ヤマモトが自分自身にとって人種問題を考えるバックボーンになったと回想している出来事、第二次大戦直後から三年間、ロサンゼルスのアフリカ系アメリカ新聞 *Los Angeles Tribune* のスタッフおよび専属コラムニストとして働いた経験を見捨てることはできない。しかし、当時のヤマモト研究において、『ロサンゼルス・トリビューン』の記事やヤマモトのコラムそのものを調査した形跡はなかった。そこで筆者は、コラムの収集、分析を進め、その過程でヤマモトの短篇についての新たな解釈の可能性とともに、コラムの分析が、二つの人種グループの当時の関係性を検証するための有効な資料となりえるという認識を得た。

『ロサンゼルス・トリビューン』（以下『トリビューン』）は、1941年に創刊され、1960年まで続いた今はない小規模な週刊コミュニティ新聞である。ヤマモトは終戦直後の1945年から三年間、この新聞社でスタッフとして働きな

がら、コラム“small talk”（日系新聞時代から引き継いだコラムタイトル）を連載していた。ここで、アフリカ系アメリカ新聞の日系人コラムニストという非常に稀なケースが生まれた背景を説明しておこう。戦時中、日系アメリカ人の強制収容によってゴーストタウン化していた Little Tokyo に、軍需景気で沸く西海岸に仕事を求めて南部から押し寄せていたアフリカ系アメリカ人が入り込み、町の名前も Brownsville へと変えられていた。終戦後は、日系アメリカ人が強制収容から帰還し、両人種グループがこの限界で共存するという状況が生まれる。やがて地域は日系コミュニティへと再編成されてゆくのだが、ヤマモトがコラムを担当していたのは、二つの人種グループの共存期間に重なっている。

1945年6月から1948年の10月まで三年あまりにわたって連載されたコラムは、身近な出来事から書評、映画評、時事問題まで非常に幅広いトピックを扱っており、ことに日系アメリカ人社会の日常生活を細やかに描くエッセイが、新聞の主な読者であるアフリカ系アメリカ人の日系アメリカ人に対する共感や異文化理解を促進したであろうことが推測できる。また、これらのエッセイのなかに、後に書かれたヤマモトの短篇と重なる部分があり、コラムがヤマモトの短篇習作の場ともなっていたことが判明した。

一方、ヤマモトのエッセイのなかでも、『トリビューン』の人種問題についての先鋭な政治意識への反応を示す部分からは、彼女が人種差別への抵抗と共闘において『トリビューン』と基本的な姿勢を共有しながら、両者の間には葛藤もあり、その溝は最終的に埋まらなかったことも読み取れた。その原因としては、人種差別問題に対する両グループの温度差、日系アメリカ人のアフリカ系アメリカ人に対する根強い偏見と白人社会への同化志向、他の人種マイノリティ以上にアフリカ系に対する差別を強化するアメリカ白人主流社会の動きが考えられる。さらに、ヤマモトの本質主義的人種観への懐疑と平和主義者としてのスタンスが、人種差別の暴力への対抗手段としての非暴力主義の有効性について、女性編集長 Almena Davis Lomax (1915-2011) と彼女の間で論争を引き起こしていたことが明らかになった。

## 『シカゴ・ディフェンダー』の日系コラムニスト S. I. ハヤカワ

『トリビューン』におけるヤマモトのコラムについての調査・分析過程で、同じような時期に同じくアフリカ系アメリカ新聞の日系人コラムニストとして活躍した人物に S. I. ハヤカワがいるという事実に気づき、興味をそそられた。アジア系アメリカ研究では、ハヤカワのケースについてはほとんど触れられることがなかったが、ヤマモトとの比較という上でも、西海岸ではなく、中西部シカゴで日系人コラムニストとしてアフリカ系アメリカ新聞で活躍したハヤカワの活動は、見直され、検証される必要があると考えた。

ハヤカワがコラムを担当していた『シカゴ・ディフェンダー』は、『トリビューン』とは対照的に、1905年創刊以来、現在も続いている大手アフリカ系アメリカ新聞である。調査の結果、ハヤカワはヤマモトより早く、すでに第二次大戦中の1942年11月から戦後1946年の12月にかけて4年の長きにわたって、毎週“Second Thoughts”と題するコラムを連載していたことがわかった。アジア系アメリカ研究では全くといっていいほど話題にされてこなかったハヤカワだが、アフリカ系アメリカ研究ではヤマモトより広く知られた存在である。アフリカ系新聞について書かれた本には、必ずといっていいほどコラムニストとしてのハヤカワの名前が挙げられている。しかし、ハヤカワのコラムの内容等について具体的に触れている先行研究は少なく、唯一、*The Black Press: New Literary and Historical Essays* に収められた論文、C. K. Doreski の“‘Kin in Some Way’: Chicago Defender Reads the Japanese Internment, 1942–1945”が、ハヤカワのコラムについても言及している。

本論では、ハヤカワが『シカゴ・ディフェンダー』に連載したエッセイを読み、その語り、内容を分析し、そこから見えてくる当時のアフリカ系アメリカ人と日系アメリカ人の人種間関係について、強制収容問題も含め、広く考察を試みる。とくに、トランスナショナルともいえるハヤカワの立ち位置が、人種差別に対抗するために人種や国家を超えて共闘することの重要性を認識させることに貢献している一方で、そのスタンスの曖昧さと彼の権威主義が、時として当事者意識を欠いた反動的な発言を引き出すことになり、後年の保守化を予感させるアンビバレンスを含んでいることを示したい。また、ハヤカワのコラ

ムが、第二次大戦当時、『シカゴ・ディフェンダー』をはじめとしてアフリカ系アメリカ新聞が推進していたダブルV、すなわち国外で人種差別的ファシズムと戦うと同時に国内の人種差別とも戦い、ともに勝利を目指すという政治キャンペーンに大いに寄与する側面を持つ一方で、目指した公民権獲得が戦時中には達成できず、大戦の終結に向かって国内の人種差別に対する政治的戦闘性を高めてゆくアフリカ系アメリカコミュニティに対し、そうした方向に背を向けるハヤカワのとの差異が際立つようになり、両者の乖離が深まってゆく過程を追っていきたい。

### 脚光を浴びるカナダ生まれの日系人学者

アメリカが日本のパール・ハーバー奇襲をきっかけに第二次世界大戦に参入してから一年足らずの1942年11月21日、『シカゴ・ディフェンダー』（以下『ディフェンダー』）はこれまでの二人のコラムニストに加えて、新たに5人のコラムニストを迎えることにした。当時NAACP（全米黒人地位向上団体）の書記長であったニューヨーク在住のWalter White（1893-1955）を始めとする錚々たるメンバーのなかにハヤカワが含まれている。アフリカ系アメリカ新聞では、当時コラムニストがすでに世論の形成に影響力のある重要な存在として認識されていた。『ディフェンダー』は、戦争によって新たな政治的局面が生まれたのに伴い、紙面での議論をより活発化するためにコラムニストを増やしたと考えられる。アメリカ国内各地から多様な人種、多様な専門分野の書き手を集めている。

その中でハヤカワが選ばれた理由は、まず、言語学者としての力量が評価されたからだと考えられる。『ディフェンダー』誌上では、“brilliant Canadian-born Japanese scholar foremost authority on language in America, and English professor at Illinois Institute of Technology”と紹介され、「言語の権威」としての資質が高く評価されている。ハヤカワの専門はもともと英米文学であったが<sup>2)</sup>、この時期、彼は、Alfred Korzybsky（1879-1950）に師事し、general semantics（一般意味論）の研究に打ち込んでいた。これは、言語学のいわゆる semantics（意味論）とは異なり、「言葉や記号を厳密に用いて人間関係を改善しようとする

る言語・教育理論」である。例えば、ユダヤ人 (Jew) という言葉は、キリスト教文化圏では非常にネガティブな含意と結びつけられるが、これは言葉の指し示す対象の本質とは全く関係がないもので、この抽象化のメカニズムを理解していないために、言葉の指示的意味と外延的な意味を混同し、偏見が生まれるのだ、と主張する。

ハヤカワは1941年、35歳の時、一般意味論をわかりやすく解説した *Language in Action* (『行動における言語』) を出版し、これが全米でベストセラーになっていた。第二次大戦勃発直後、ヒトラーのナチズムが勢力を拡大し、ユダヤ人排斥主義やファシズムのプロパガンダが問題視されていた時期に、それに対抗する教育的な効果を狙った一般意味論の著作が、アメリカで広く受け入れられたのだ。さらに、従来から人種差別問題が主たるトピックであったアフリカ系アメリカ新聞にとっても、ハヤカワの議論は注目に値するものだった。ハヤカワも初回のコラムで、自分は知識人として大衆を見下すことも、大衆におもねることもなく、言いたいこと、言うべきことを書いていく、と学者としての自負を表明している (“Second Thoughts” [以下 “ST.”], November 21, 1942)。

ハヤカワがコラムニストに迎えられたもう一つの重要な理由は、彼がシカゴに住む日系人であったということであろう。注意すべきは、上記『ディフェンダー』の紹介文にも示されているように、当時、彼は国籍上、日系アメリカ人ではなく、日系カナダ人であったことである。ハヤカワは、著書 *Language in Action* において、自分の国籍や人種・民族的定義の難しさを次のように説明している。

... the present writer is by “race” a “Japanese,” by “nationality” a “Canadian,” but, his friends say, “essentially” an “American,” since he thinks, talks, behaves, and dresses much like other Americans. Because he is “Japanese,” he is excluded by law from becoming a citizen of the United States; because he is “Canadian,” he has certain rights in all parts of the British Empire; because he is “American,” he gets along with his friends and teaches in an American institution of higher learning without any noticeable special difficulties. (153)

上記引用にもあるように、当時アジア人移民はアメリカへの帰化が法的に認められていなかった（戦後1952年に改定）。カナダで生まれ、大学院修士までを終えてアメリカに移り、アメリカ中西部の大学で博士号を取得、以後、この地で研究・教育活動が続いていたハヤカワは、国境をまたぐ、いわばトランスナショナルな存在であった。戦争によって日本が敵国になり、それによってアメリカ西海岸に住む日本人移民、その子供たちである日系アメリカ人約12万人が敵性外国人として強制収容されるという状況下、強制収容を免れたシカゴに住む日系カナダ人として、ハヤカワはアフリカ系アメリカ人読者に対し、日本および日系アメリカ人についての理解を促すコメントを期待されていたと思われる。

ハヤカワのコラムのタイトルは「再考」を意味する“Second Thoughts”、三つの小見出しのもとに、それぞれほぼ均等の量で話を展開するという構造を一貫して保持した。初期にはハヤカワの顔の小さなイラスト（後に写真に代わり、その後、顔写真は消えている）が添えられていた。トピックは多様で、時事問題、美術や音楽、身近な出来事、日本についてなど自由に書いている。一般意味論の議論を取り上げることもあり、新進気鋭の言語学者としての顔を前面に押し出しているが、英米文学者としての素地も覗かせ、文学や芸術に関する話題も取り上げている。

### ダブルVを擁護する日系人——トランスナショナルな位置取りの利点

『ディフェンダー』などのアフリカ系の中心的メディアがダブルVを掲げる一方、アフリカ系コミュニティには、国内の過酷な人種差別のもとに置かれている状況下、アメリカのために戦うことに積極的になれない気分も根強くあった。ハヤカワは、第一回コラムでの自己紹介に続き、二回目のコラムではこうした厭戦気分に対して、ヒトラーのアーリア人至上主義は、ユダヤ人ばかりでなく黒人を「犬や馬のように」蔑視していることを伝え、人種優越論そのものと戦うために、この戦争に勝たなくてはならないと説いている（“ST.” November 28, 1942）。

これ以後も、ナチズムの人種主義だけでなく、たびたび日本における軍国

主義者の個人名をあげながら、彼らがいかに中国やアジアの国々を侵略し、またいかに日本国内の自由を弾圧しているのかを語り、日本事情に通じた日系人としての知識を披露しつつ、読者に対日戦争への参加を促している。日本政府の言論弾圧から逃れてアメリカに来た画家の Taro Yashima (1908-1994)<sup>3)</sup>が、拘留され、拷問を受けた日本での過酷な日々を絵とコメントで表した自伝的著作 *The New Sun* についても紹介している (“ST.” November 13, 1943)<sup>4)</sup>。

幾つかのコラムで日本をバックグラウンドに持つ日系人としての側面を前面に出しているハヤカワだが、シカゴに少数ながら在住していた日系アメリカ人やそのコミュニティについて書くことはほとんどなく、彼がむしろアフリカ系アメリカコミュニティの一員として地域に溶け込み、活動している様子が描かれている。例えば、人種隔離の徹底した南部と異なる自由さを持つシカゴの魅力を語り、ワシントンからシカゴへ向かう汽車の食堂車で、白人男性二人が黒人女性二人のために席を空け、四人が気持ちよく同席し、語り合っている場面に遭遇したことを報告している (“ST.” September 11, 1943)。また、アフリカ系アメリカ人に関係する本の書評やイベントの紹介も、たびたび行っている。

さらに特筆すべきは、ハヤカワはジャズ通として豊富な知識を持ち、ジャズのレコードや本に関する批評も数多く書いている点である。とくに boogie woogie に傾倒し、熱を込めて生き生きと語っている。例えばブギウギの創始者ともいわれる Clarence “Pine Top” Smith にはたびたび言及し、ある回では以下の引用のように、彼のピアノの超絶技巧を、英国ロマン派の詩人 Shelley の “To the Skylark” と掛け、ジャズのリズムに乗せながらユーモアを交えて語り、絶賛している。

With that “Pine Top” Smith starts playing “Jump Steady Blues”—and what music it is! With his right hand fluttering rapidly, delicately, fancifully, like a flight of humming birds, and his left hand beating out a solid four-four rhythm that stays solid even when breaks it up into eights, he conveys a lyric madness, a joyfulness of sound that makes one want to shout, as Shelley did of the skylark, “Hail to thee, blithe spirit—whip that thing, Mr. Skylark, whip that thing till it sweat now—hey, hey!”

(Well, maybe that's not exactly what Shelley said.) ("ST." September 18, 1943)

そのほかの回でも、白人と黒人がジャズを演奏する場面を報告し、ジャズが人種間の協調を促進するものであることや、ジャズがクラシックに劣らず、国境を越えて演奏され、人々に愛される音楽ジャンルであることを強調している。

さらに興味深いことに、当時ハヤカワは生活協同組合の活動に関わっており、組合への入会を熱心に促すなど、『ディフェンダー』側からクレームがつくほど頻繁にこのトピックを取り上げている。ハヤカワは、この活動が人種協調にも役立つと主張し、支部の役員の白人、黒人の人種比率が半々であることなどを報告し、何度も勧誘の記事を書いているのである<sup>5)</sup>。

### 人種的マイノリティ間にある偏見を批判する

彼の複合的、トランスナショナルな視点が最もよく表れているのは、アフリカ系アメリカ人や日系アメリカ人など人種的マイノリティの間にもある人種差別意識を暴き、人種的マイノリティ間の共闘の必要性を説くエッセイにおいてである。

あるエッセイでは、まず、友人の息子、2歳になるジャッキーが、親、兄弟を含めて年上の人ばかりに囲まれて育っていたのだが、ある日、自分より年齢の低い小さい子どもたちに出会い、突然、人が変わったように自信をつけた、というエピソードを紹介する。そして、自分より劣った者を想定することで自尊心を満足させるメンタリティを“two-year-old mentalities”と呼び、これこそが人種差別を生む精神構造だと批判して次のように結び、人種差別、あまつさえ、マイノリティ同士の差別を止め、共闘することを説いている。

When minorities, whether Negroes, or Jews, or Mexicans, or Pacific Coast Japanese-Americans, or anybody else, are discriminated against, they are the victims of the two-year-old mentalities in the majority culture. Haven't we, who are members of minorities, got troubles enough without making even more trouble for ourselves for acting like two-year-olds toward each other? ("ST." December 12, 1942)

これは1942年12月12日付けの記事である。ここでハヤカワは“Pacific Coast Japanese-Americans”という表現を用い、西海岸の市民権をもつ日系アメリカ人に課せられた不当な強制収容の事実を、読者に明らかな人種差別として認識させようとしている。この時期、強制移転命令は肅々と進められ、すでに人々の内陸部のキャンプ地への移送が完了していた。『ディフェンダー』では、特派員 John Robert Badger (アフリカ系) のコラムで、西海岸から直接、強制収容について報道をしていたが、それらは政府の言語統制のもと、WRA (War Relocation Authority 戦時転住局、集団強制転住を実施し、管理するための政府機関) が流す情報を鵜呑みにした記事であった。

これ以外にも、被差別人種間での偏見を批判し、団結を訴えるエッセイは度々書かれている。その一つは次のような内容である。まずデンバーを訪れたとき JACL (Japanese American Citizens League 全米日系市民協会、二世を中心とした政府よりの組織) のメンバーから、人種的偏見から強制収容されている自分たちもメキシコ人や黒人、ユダヤ人に対して偏見を持っていると告げられたこと、また別の機会には、日系アメリカ人の若い女性<sup>6)</sup>を黒人が働く工場で雇おうとしたところ、ある黒人女性労働者からの反対もあったが、実際に働いてみるとその黒人女性は自分の偏見に気づき、日系人女性も黒人たちに感謝と好意を示した。しかし、最後にその日系女性が述べたのは、「ユダヤ人と働くのは嫌だ、ユダヤ人は嫌い」、という言葉だった。このように、ここでは「人種差別の被害者が人種差別の毒を振りまく」様子が皮肉を込めて報告されている (“ST.” August 12, 1944)。このエッセイは好評だったため、戦後、再掲載された。

### 当事者意識に欠ける権威主義的スタンス

しかし、上記で指摘した“Pacific Coast Japanese-Americans”という表現は、見方を変えれば強制収容が西海岸の日系アメリカ人に限ったものであり、そこに日本人移民として市民権が与えられていなかった多くの人々が含まれていた事実が隠され、またこれが西海岸の日系アメリカ人に対してのみの差別であり、それ以外の場所に住んでいる日本人、日系アメリカ人には全くその影響が

なかったようにも読める。

ハヤカワが日系アメリカ人の収容についての問題を単独で正面から取り上げるのは、集団強制移転命令が出てから2年あまりが過ぎた1944年10月のコラムにおいてである。

You all know the story by now of the Japanese-American during this war: how they were uprooted from their homes, citizens and non-citizens alike, how they were moved off the Pacific Coast into assembly centers farther inland, and latter how relocation centers were put up for them in desert regions of Arkansas, Arizona, Utah, Wyoming, and Colorado....

My own feeling is that it was a lucky thing that, if they [WRA officials] had relocated anybody, they picked the Japanese. If they had tried to relocate, for example, Irishmen I am sure there would have been mass rioting. Japanese are, especially in matters pertaining to government, surprisingly docile. (“ST.” October 28, 1944)

ハヤカワはここで、日系アメリカ人に対する強制収容の事実を厳しく弾劾することから始めるが、問題は、その後の文章が示すように、日本人をアイルランド人に比べて政府に従順な人種として本質主義的に捉え、強制収容を擁護するとも取れる発言をしている点である。ハヤカワの一つの国家に縛られない視点は、国家間、人種間をまたぐ融和的視点と同時に、国家や人種を越えた超越的視点をもたらすことになっており、時として当事者意識、すなわち、自分も人種的日本人として差別される可能性があった、あるいは可能性があるという場合は想定されておらず、被差別者への共感に欠ける無責任なコメントになっている。

後の別のコラムでは、日系アメリカ人の子供たちを教える WRA の白人教員たちを褒め称え、これらの人こそ人種差別に遭遇するアフリカ系アメリカ人の子供たちを教えるのにもふさわしいのではないかと、などと根本的な人種差別構造に鈍感な発言もしている (“ST.” November 11, 1944)。

ハヤカワのこうした人種差別に対するアンビバレンスは、トランスナショナルな超越の立ち位置とともに、彼の権威主義、エリート意識によってより強化されている。それは、zoot riots についてのエッセイにも見られる (“ST.” June 26, 1943)。メキシコ人、メキシコ系アメリカ人の間で広がったズートスーツ（ゆったりとした肩幅の広いだぶだぶした上着とズボンの組み合わせ。若者の間で流行した）を着ることは、戦争当時、だらしがない、生地が無駄遣いなどが理由で、不良、反米的と看做された。

事件は、ロサンゼルスにおいてズートスーツを着た若者とアングロ・アメリカンの米軍兵士との間でけんかが始まり、これに一般人が加わり、10日間も続く暴動へと発展したというものだ。この時、ロサンゼルス警察が過剰な暴力と不法逮捕によって zoot suiters を取り締まり、大粛清を行った。

ハヤカワは、これはマイノリティの若者に共通した抵抗の形であると理解を示しながら、最終的には警察権力による人種差別的暴力を批判するというより、むしろこの混乱をうまく鎮圧できなかった警察の責任を問題視し、若者への共感に欠ける大人目線からのコメントを述べている。Dreski も指摘するように、部外者の視点から冷静に眺めているハヤカワの言葉には、同じトピックについて書いている別の『ディフェンダー』コラムニスト、Langston Hughes (1902-1967) のコメントに見られるような人権侵害に対する切迫した危機意識が感じとれないのである。

## 戦後——人種差別への対抗意識を高めるアフリカ系アメリカ人社会からの乖離

終戦直前のコラムで、ハヤカワは日本の天皇制の歴史を追って解説し、天皇制を批判しつつ、日本統治については以下のように問いかけている。

Let us, by all means, give democratic, equalitarian, and global-minded precepts and examples to the Japanese. Let us encourage peasants and workers and intellectuals to emerge from their miserable condition and put an end to the raw deal they have been getting. (“ST.” August 11, 1945)

ここで注意したいのは、“us”という代名詞の安易な使い方である。ここでの“us”すなわち“we”とは誰を指すのか。ここにアフリカ系アメリカ人を始めとする人種的マイノリティは含まれるのだろうか。少なくともアフリカ系アメリカ人自身はそこに含まれるとは感じなかったのではないだろうか。

以下の引用は、ハヤカワの安易さとは異なる当時のアフリカ系アメリカ人社会の気運をうまく伝えている。

World War II failed to rid the United States of the Jim Crow laws that virtually guaranteed second-class citizenship to the black community. According to the sociologist E. Franklin Frazier, however, the war signified an important turning point in this country: “The Negro was no longer willing to accept discrimination in employment and in housing without protest.” (De Santis, 7)

戦後、アフリカ系アメリカ人は人種差別に対する抗議の姿勢を高め、団結力を深めていく。アフリカ系アメリカ人が政治的に戦闘モードに変化してゆく様子をハヤカワは容認しておらず、しばしばこれを“self jim-crowing”と呼んで非難している。例えば、大学でも白人と交わらず、研究の課題もアフリカ系のテーマのみに絞って行うといったような態度に対して異議を表明している。また、居住区拡大のためにアフリカ系が団結して差別と闘うことについても、以下の引用のように批判している。

... when a Negro family moves into a white community and there are rumors that the white community isn't going to like it, the friends of the Negro family are likely to say, “We'll go with you as a body guard. If they try to keep you out, we'll fight with you.”

... if Negroes are to expand their living area, they will be much more likely to achieve it by returning love for hate, kindness for unkindness, than by following the primitive war-like reflexes of the raised fist and the clenched jaw. (“ST.” December 21, 1946)

人種の本質主義的な捉え方によって生まれる差別に団結して対抗するためには、自らも本質主義的にならざるをえないという政治運動の構造は、マイノリティ問題の解けないアポリアのようにも思えるが、ここで安易に愛や寛容を説くハヤカワの楽天主義も現実的ではないだろう。実際、アフリカ系アメリカ人が白人地区に買った家を焼かれ、命まで失った例がいくつもあったという事実は、現実問題の困難さと厳しさを示している。比較的人種統合が進むシカゴという場所を考慮しても、彼の提言は、当時のアフリカ系アメリカ人にとっては受け入れられるものではなかっただろう。この次の回を最後に、ハヤカワのコラムは『ディフェンダー』から消えることになる。

## 結びにかえて

ロサンゼルス郊外、フォンタナで実際に起こったアフリカ系アメリカ人一家への放火殺人事件を題材に、日系アメリカ人として、アフリカ系アメリカ人という他者に完全に同化し、寄り添い、共闘して戦うことの困難、暴力に対して暴力で対峙することへの葛藤に引き裂かれ、悩み苦しむ姿を後に短篇小説化したもう一人のアフリカ系アメリカ新聞のコラムニスト、ヒサエ・ヤマモトと比べてみると、他者への愛を説くハヤカワのコメントは、それ自体正論ながら、現実の状況に関り合うことのない超越的立場から発された、あまりに安易で無責任な言葉にも響くのである。

\* 本論文は JSPS 科研費 19520245 「日系二世知識人とアフリカ系アメリカ新聞——異人種間共闘をめぐる語りの比較分析」の研究成果の一部である。

## 注

- 1) キャンパスにおいて学生抵抗者の声を流す拡声器の線を引きちぎったという暴力行為が語り草となっている。ハヤカワは1972年に学長の座を退いた (*Encyclopedia of Japanese American History*, p. 188)。ちなみに、サンフランシスコ州立大学では1969年、全米で初めて Ethnic Studies がカリキュラムに組み込まれた。
- 2) 1935年 “Oliver Wendell Holmes: Physician, Poet, Essayist” によって University of Wisconsin から博士号を授与されている (Haslam, 66)。

- 3) 戦後、ヤシマは絵本作家として活躍した。代表作は *Crow Boy* (1956) や *Umbrella* (1958) など。俳優のマコ・岩松の父でもある。
- 4) 当時、日本の軍国主義批判の本ながら日本人の著作ということで、出版社は宣伝のためリベラルな知識人に本を寄贈したというのが、戦時中でもあり、売れ行きは芳しくなかった (Shibusawa, xi-xii)。ハヤカワがこれをコラムで扱ったことは例外的なことであったと考えられる。
- 5) ただ、彼が生協に関るようになった経緯はコラムの文面からはわからず、これまでに出版された唯一の伝記 (Haslam) にもそれについての詳しい記述はない。
- 6) この時期、すでに日系アメリカ人二世の若者については、引き受け先があれば取容所の外にて働くことが許されていた。この女性は仮出所中の労働者と考えられる。

### 引用・参考文献

*Chicago Defender*, Chicago, 1942-1946.

De Santis, Christopher C, ed. *Langston Hughes and the Chicago Defender: Essays on Race, Politics, and Culture, 1942-62*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1995.

Doreski, C. R. "'Kin in Some Way': The Chicago Defender Reads the Japanese Internment, 1942-1945." In *The Black Press: New Literary and Historical Essays*. ed. by Todd Vogel. New Brunswick: Rutgers University Press, 2001.

Franklin, John Hope. *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans Third Edition*. New York: Alfred A. Knopf, 1967.

Haslam, Gerald W. with Janice E. Haslam. *In Thought and Action: The Enigmatic Life of S. I. Hayakawa*. University of Nebraska Press, 2011.

Hayakawa, S.I. *Language in Action*. New York: Harcourt, Brace and Company, 1941.

Jones, LeRoi. *Blues People: The Negro Experience in White America And the Music That Develop from It*. New York: Quill, 1963.

Murata, Alice. *Images of America: Japanese Americans in Chicago*. Chicago: Arcadia Publishing, 2002.

Niiya, Brian, ed. *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1869 to the Present, Updated Edition*. New York: Facts On File, Inc., 2001.

Pride, Armistead S. and Clint C. Wilson II, eds. *A History of the Black Press*. Washington D.C.: Howard University Press, 1997.

Sanchez, George J. *Becoming Mexican American: Ethnicity, Culture and Identity in Chicano Los Angeles, 1900-1945*. New York: Oxford University Press, 1993.

Shibusawa, Noriko. "Introduction." *The New Sun* by Taro Yashima. Honolulu: University of

Hawaii Press, 2008.

Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories: Revised and Expanded Edition*. New Brunswick: Rutgers University Press, 2001.

村山瑞穂「ある異人種間文化統合の試み——ヒサエ・ヤマモトと『ロサンゼルス・トリビューン』」愛知県立大学外国語学部『紀要』第35号、2003年、pp. 127-141.